

氏名	半 澤 敦 正
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	甲 第 125 号
学 位 授 与 の 日 付	昭和39年 3 月31日
学 位 授 与 の 要 件	医学研究科内科系内科学専攻 (学位規則第5条第1項該当)
学 位 論 文 題 目	脾組織培養法による脾内巨核球に関する研究
論 文 審 査 委 員	教授 平 木 潔 教授 小 坂 淳 夫 教授 小 川 勝 士

学 位 論 文 内 容 要 旨

ヒト胎児、及びヒト病的脾生検材料、並びに各種実験哺乳動物（マウス、ラッテ、モルモット、家兎、イヌ及びネコ）の脾内巨核球について、教室考案の臨床組織培養法により、主としてその運動能及び栓球生成能を中心に検討した。

脾内巨核球にも骨髓巨核球同様、変形運動、偽足運動、栓球分離を営む触手状突起形成運動を認めた。ヒトでは胎生4カ月で運動能及び栓球生成能を認めたが、胎生5カ月以後では巨核球機能の低下を認めた。モルモット、家兎では胎生中期以後、巨核球機能の著明な低下を認めた。ネコでは新生児期迄、マウス、ラッテ及びイヌでは幼若期に至る迄、脾内巨核球の運動能及び栓球分離能を認めたが、それ以後の発育段階では巨核球機能の減退を認めた。

脾内巨核球機能は脾に於ける赤血球系造血と密接な相関関係を有し、両者はその消長を共にすることが判明した。

病的ヒト脾組織培養に於て脾内巨核球を認めたのは骨髓線維症に基く類白血病反応の一症例のみであった。しかし骨髓線維症では、脾内巨核球の機能低下が著明で、栓球生成能を有する巨核球は認められなかった。

昭和38年10月発行 岡山医学会雑誌75巻10号に掲載

論文審査の結果の要旨

半澤敦正提出の「脾組織培養法による脾内巨核球に関する研究」に関する学位論文につき審査した結果の要旨は、次の通りである。

著者は、ヒト及び各種実験哺乳動物の脾内巨核球について、平木式臨床組織培養法により、その運動能及び栓球生成能について検索している。

脾内巨核球にも骨髓巨核球と同様、変形運動、偽足運動、栓球分離を行なう触手状突起形成運動の存することを認めている。即ち、ヒトでは胎生4カ月、モルモット及び家兎では胎生中期、ネコでは新生児期、マウス、ラッテ及びイヌでは幼若期、に至る迄それぞれ脾内巨核球に運動能並びに栓球分離能を認めている。しかし、それ以後の発育段階ではそれぞれ巨核球機能の著るしい減退を来すことを明らかにしている。

更にこれ等脾内巨核球機能は、脾赤血球系造血能と密接な相関関係を有し、両者はその消長を共にすることを認めている。

又各種病的ヒト脾組織培養に於ては、骨髓線維症の一例にのみ脾内巨核球を認めているが、この巨核球機能は著るしく低下していることを明らかにしている。

以上の通り本論文は新しい知見に富み、学術上有益であり、著者は医学博士の学位を授与せられるべき学力を有すると認める。